

タ行ダ行破擦音化の音韻論的特質

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高山, 知明 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17458

タ行ダ行破擦音化の音韻論的特質

高山 知 明

1. 本論文の目的

タ行ダ行の破擦音化と言え、日本語史（国語史）の概説書に必ず言及されるような、音韻史の基本的事項の一つに数えられる、よく知られた歴史的变化である。それにもかかわらず、この現象について本格的に論じたものとなるとごくわずかしかない。音韻論的対立が失われ、仮名の書き分けに混乱をもたらす変化でないことから、チ、ツ、ヂ、ヅに生じた音声的差異としてのみ捉えられ、その意味であまり重要視されてこなかったのではないと思われる。日本語音韻史においては、破擦音化に引き続いてその区別が失われた「四つ仮名」が主であり、破擦音化はいわばその付随的位置に留められてきたというのが実際のところではなかっただろうか。

しかし、本論文の筆者は、この現象の特質を明らかにしようとするならば音韻論的観点すなわち対立の観点がたいへん重要であると考え。諸言語の破擦音化に比した時、日本語のこの事例で注目すべきは、母音の*i*（それに加え拗音の*j*）の前だけでなくuの前でも生じたという、たいへん興味深い点である。本論文は、この点を中心に、当変化に関する歴史的問題を掘り下げる。また、その変化の進行過程が、音変化の一般的性質を考える上であらためて有用な示唆を与えてくれる点についても述べる。

なお、この主題に関しては高山知明（2006）においても取り上げたが、他の問題と併せて述べたため論述が十分ではなく、また、その後、補うべき点、改めるべき点が生じたため、ここであらためて本格的に論じ直すこととした。

過去における、破擦音の出現の仕方、あるいは破擦音化に関して方言による差が少なからず考えられ、それぞれの具体的歴史がかなり異なるおそれがある（具体的には高山知明2006）。そのため、以下の考察の対象は当面、京都を中心とする近畿方言に限定する。

2. タ行ダ行の破擦音化

最初に、ごく簡単にこの現象の概要について触れておく。破擦音化はおおよそ以下のようにして生じたと推定されている。

チ *ti* > *tʃi*, ツ *tu* > *tsu*
ヂ *di* > *dʃi*, ズ *du* > *dzu*

拗音においても $tja > tja$, $dja > dja$ などのように破擦音化を生じるが、以下では簡略に従い、これらは「チ、ヂ」に含めて示すことにする。

もちろん、破裂音から破擦音への移行といっても、その間は連続的であり、破擦音に落ち着く前のすでに早い段階から摩擦を生じる傾向は徐々に起こっていただろう。上のような抽象化のうらにそうした状況があったことは踏まえておかなければならない。

本格的な破擦音化前のタ行、ダ行の子音の音価推定は主に中国資料、朝鮮資料をもとになされている¹。いま、その文献上の手掛かりを一つだけ掲げるとすると、弘治五年刊『伊呂波』(1492)の「いろはうた」に付されたハングルによる音訳がある。「ち」に対しては「ㄷ」が、「つ」に対しては「ㅌ」が用いられており、これは、当時の日本語においてチツヂヅがまだ完全には破擦音に変化し遂げていなかったことを示すものと考えられている。これよりはるか以前の、上代における音仮名について見れば、東歌のような例外を除くと、タ行ダ行に該当する原音声母は、中古漢語の舌音(破裂音と推定)に属しており、歯音字ではない(「歯音」の範疇には破擦音が含まれる)。少なくとも近畿中央方言に関する限り、文献時代以降16世紀に至るまで、おおむね、タ行ダ行は、タテトダデドのみならずチツヂヅに関しても、破裂音と母音の組み合わせから成っていたと推定されている。

3. 問題点

タ行ダ行の破擦音化は下記(1)のような変化であり、チツヂヅがその音声の実質を変える一方($a \rightarrow a'$, $b \rightarrow b'$ がこれに当たる)、タテトダデドはその実質を変えない($c \rightarrow c$ がこれに当たる)。しかし、これによって全体の関係性には変更が生じないように見える。

$$(1) \quad \begin{array}{l} a \rightarrow a' \\ b \rightarrow b' \\ c \rightarrow c \end{array}$$

これに対し、(2)のような変化では二つの音韻論的単位が合一化し、その前後で音韻体系が変わる。例を挙げれば、破擦音化に続いて生じたジとヂ、ズとヅの合流がそれである。

$$(2) \quad \begin{array}{l} a \searrow \\ \quad \quad \quad b' \\ b \nearrow \end{array}$$

a が b に合流 (音韻論的対立が消失)

これと比べると、タ行ダ行の破擦音化は、一見したところ、音声学的な差異が生じたに過ぎず、音韻体系の根幹に関わらないかに見える。これまで、それを自明のこととしたためか、破擦音化の歴史的問題はあまり興味の対象とならなかったと思われる。

以下、さらに、具体的にこの変化の特徴を指摘する。

まず、その生起条件についてである。二つの狭母音 i と u の前(拗音要素 j を含む。

以下略)で生じているが、それはどのように説明されるのだろうか。かりにチ, ゼだけに破擦音化が起こったとすると、後ろに続く前舌母音 i による口蓋化 palatalisation のさらなる進展として説明することができる。しかし、ツ, ヅにも起こっているのです、そのような説明によっては現象を包括的に理解することができない。この破擦音化は、前と後の二つの狭母音を持つ音節においてほぼ同時に起こっており、これを無視することはできない。要は、この生起条件の性質をどのように見極めるかである。

二点目は、体系内にあらかじめ破擦音を実質とする音素が存在するところに、さらに他においても破擦音化が生じ、元からの破擦音の音素に合流するという変化ではないことである。

(3) j の前での破擦音化の例 (英語)

adventure tʃ>ʃ 一語内での歴史的変化 cf. church (この時点で既に ʃ)
...that you..., ...got you, tʃ>ʃ 語連続に生じる変化

例えば、英語における(3)の例では、すでに音素として ʃ が存在しているところに、さらに破擦音化が起こっている。日本語のタ行ダ行の破擦音化は、このようなかたちで生じたものではなく、新しく破擦音が生み出されている点に注意される。

以上、この二点をまとめておく。

(あ) 二つの狭母音の前ではほぼ同時に破擦音化している。

(い) タ行ダ行破擦音化以前に、体系内に破擦音素が存在していない¹⁾。この変化によって破擦音が新たに生み出されている。

4. タ行ダ行破擦音化の音声学的条件

チツヂヅに共通する音声条件は、いずれも狭母音の前であることである。だからといって、狭母音という条件だけでただちに破擦音化が生じるとするのには無理はないだろうか。もちろん、形式面だけからすれば単一の条件で処理するのが望ましい。しかし、前舌母音の場合には口蓋化という契機が見出せるのに比べると、それを拡大した、狭母音という規定では射程が大き過ぎ、一貫した関連性が見出しにくく、この条件がどのように破擦音化に結びつくのかという点に対する説明が難しい。さらに言えば、チヂでの破擦音化が前舌母音と関わるとしても、後舌母音に関わる音節がなぜ同じタ行ダ行(すなわちツヅ)でなければならないのか、例えば、カ行ガ行(すなわちクグ)が破擦音化の対象にならなかったのかという疑問も生じる。もちろん、そのような変化は想定しにくいかもしれないが、それと同じくらいに、チヂとツヅにはほぼ同時に生じている点にもより説得力のある説明が必要である。そのため、狭母音という音声条件では、この歴史的事象に対するより深い理解に結びつかない。

以上のような音声学的観点からは、チヂ、ツヅのそれぞれの破擦音化の条件を別個に考えざるをえない。そこで、当面は別々に、それぞれの音声の特質に関する歴史的事実を踏まえて音声条件を検討する。

(チヂの破擦音化)

上に述べたように、これらでは母音 i によって口蓋化する条件にある。そのように

理解すれば、歯茎音（ないし歯音、以下略）tの後でiの硬口蓋への舌の盛り上がり
が、口蓋的な摩擦要素 [ʃ] [ʒ] の発生に関わっていると考えることができる（こ
こで用いる IPA は [ɕ] [ʒ] との違いを問題としない。簡略表記の習慣に従う）。

〈ツツの破擦音化〉

朝鮮資料『倭語類解』『改修捷解新語』において日本語ス・ツ・ズ（ヅ）のuに、
ス、ズのような非円唇の字母を当てているという事実がある。この転写は破擦音の問
題を考える上でたいへん示唆的である。

日本語の後舌狭母音は全体として唇の丸めが弱いと言われる。なかでも歯茎音の後
ではその調音位置の影響を受けて、後続母音の中舌化がより起こりやすい。その音色
の明るさが、/u/ /ɯ/ の二つをその母音体系に持つ朝鮮語の母語話者によって感知され
て、日本語の音韻にとっては有意でない違いをも文字上に反映させたものと推測され
る。

そして、さらに、歯茎音tの調音位置と、中舌化した母音の舌の盛り上がり位置と
が近接するために、狭めがより持続し、摩擦要素が発生しやすかったと考えられる。
ツツの破擦音化はこのように考えることができる。

以上のように個々に考えると、いずれの場合も摩擦要素発生に対する説明をするこ
とができる。本節の前半で日本語のuを後舌としてきた点も、音声学的には中舌とす
るのがより正確だとすればそのほうがツツの破擦音化の説明がしやすい。この点は誰
しも思いつくところであり、上記の整理はそれを確認したにすぎない。

しかし、これでは、なぜほぼ同時期にこれら二つの変化が生じたのかという肝心の
問題は置き去りにされたままである。要するに、個別に音声変化の条件を並べてみて
も、日本語史におけるこの変化の特質、その歴史的位置ないし出来事としての性質を
つきとめることはできない。音声条件によるだけではこの歴史的出来事の解明にたど
り着けない。

もちろん、「二つの」破擦音化はそれぞれが異なる条件に従ってたまたま同じ時期
に起こったという可能性を原理的には排除することができない。しかし、他ならぬ破
擦音化がほぼ同じ頃に起こったとすれば、まずは一つの変化と見なすのが適切である。
そうだとすれば、包括的に説明する線は安易に放棄することはできない。

5. タ行ダ行破擦音化とサ行ザ行の子音

上に述べたように上記朝鮮資料において、破擦音化したツではサ行のストともにu
に非円唇の字母を当てている。そしてズ（ヅ）もこれと同様である。中舌化の傾向は、
タ行ダ行と、サ行ザ行とに顕著であったことを反映している。ス・ツ・ズ（ヅ）は、
その母音が中舌的である点で一つの組を構成しており、しかも、タ行ダ行の破擦音化
後は、サ行ザ行と同じ音色の摩擦要素 [ʃ] [ʒ] を持つ点で共通するに至っている⁴。

そして、これとよく似た状態が、一方のシ・チ・ジ（ヂ）にも見られる。つまり、
破擦音の後、口蓋的な音色を持つ摩擦要素 [ʃ] [ʒ] を持つという共通性がこれらに

生まれている。

このように考えると、破擦音化によって、タ行チ、ツとサ行シ、スとの間に相関関係が出来上がっていることがわかる。破擦音化といえば、他ならぬ摩擦要素の発生のことだから、これは至極当然のことと思われるかもしれない。しかし、この一見当たり前と思われることの持つ意味について、これまで掘り下げては考えられてこなかったのではないだろうか。ここまで述べてきたことを整理すると、この現象には以下の二つの側面があることになる。

- a. チヂとツツ，すなわち，母音 i と u とでは破擦音化を引き起こす音声条件が異なる。
- b. チヂとツツとに共通する点は，いずれもサ行，ザ行の子音と相関関係を持つことである。すなわち，チヂとシジの間，ツツとスズの間それぞれに，上に述べた一定の関係が認められる。

これら a. b. のうち鍵を握るのは後者である。つまり，破擦音化とサ行，ザ行の子音との関係を探る必要がある。

6. タ行ダ行における破擦音の発生—摩擦の拡張化

タ行ダ行の破擦音化が起こる前段階における，サ行のシとス（ザ行のジとズ）の区別はどうであったか。この時点でス，ズの中舌化がどの程度であったかを判断する決定的な手掛かりはないが，少なくともその母音はさほど門唇的でなかったと考えられるので，シとス，ジとズの区別は，実質的には次のようであったと想定される。

Ci 口蓋的	Cu 非口蓋的
(シ, ジ)	(ス, ズ)

この想定を支える重要な手掛かりは，キリシタン文献のローマ字綴りである。以下のような，ポルトガル語を土台とした綴字法によって，摩擦の音色の違いが顕現している。

シ xi	:	ス su
ジ ji	:	ズ zu

後に続く母音の違いに応じて口蓋的，非口蓋的の違いが生じており，それがアルファベットの選択に反映されたものと解釈される。キリシタン文献は，時期的に見て破擦音化よりも後に属するが，この音声の差異は破擦音化直前の時期からキリシタン文献の時期までの間に新たに現れたものとは考えられない。すなわち，それを示唆する材料はなく，そうした変化は生じていないと見なされる。ゆえに，これらの音色の差異は，破擦音化が起こる際にすでに存在していたと推定して差し支えない。

ところで，上記の Ci と Cu は，C（子音）それ自体で音色の違いを出すことができる。すなわち，母音に依らなくとも，その摩擦音だけで区別が容易に行える。その点を強調すると次のように示される。

Cⁱ 口蓋的（具体的には [ʃ] [ʒ]） C 非口蓋的（具体的には [s] [z]）

これらにおける [ʃ] と [s]，[ʒ] と [z] の違いは，音韻論的解釈の立場から言え

ば、それぞれ後続母音 i, u の環境同化によるものと認められる。つまり、たがいに異音の関係にあり、この違いは示差的でないとされる。

しかし、その摩擦の音色の違いは一定しており、シとス、ジとズにおいては、現実には母音を弱めたり落したりしても支障がなかったと考えられる。すなわち、この点について言えば、サ行、ザ行は15世紀の段階で現代語とほぼ同じ状態にあったであろう。現代語においてはいわゆる無声化と呼ばれる、実質的に母音が実現されないケースは枚挙にいとまがない（例えば、「あした」のシの音、「たすける」のスの音）。程度の差こそあれ、当時においても、同様に母音を実現されない場合があつておかしくないと考えられる⁵。音韻論的解釈としては余剰的 (redundant) と認められても、摩擦の音色の相違は、シとス、ジとズの聞き分けに重要な手掛かりを与える特徴であつたにちがいない。

さて、他方において、タ行チツ、ダ行ヂヅが破擦音で実現されるようになると、上に述べたのと同じ関係がこれらにも次のように顕れてくる。

Ci 口蓋的	Cu 非口蓋的
(チ, ゼ)	(ツ, ズ)

つまり、後続母音の違いに応じた口蓋的、非口蓋的の違いが摩擦の音色によって表出されるようになる。シ対ス、ジ対ズと並行的な関係が、チ対ツ、ヂ対ヅに出来上がってくる。

Cⁱ 口蓋的 (具体的には [ʃ] [ʒ]) C 非口蓋的 (具体的には [s] [z])

また、上記の Ci と Cu とが、C (子音) それ自体の違いで識別できる点においてもサ行、ザ行と同様である。母音に依らなくとも、子音だけ (とりわけその摩擦要素) で区別が容易に行える関係がタ行、ダ行でも生み出されている。

以上のように考えると、この変化は、摩擦の音色差を識別に使う仕組みが、サ行のシス、ザ行のジズから、タ行のチツ、ダ行のヂヅへ拡張化する現象として理解できる。チとツ、ヂとヅの対において、口蓋的対非口蓋的の違い (これを音韻論的対立と直ちに呼ぶのは躊躇されるが、少なくともそれに準ずる関係) が摩擦要素として定着化する過程である。

母音 i の前とともに u の前でも破擦音が発生したのは、単に後続母音による同化というのではなく、狭母音音節間の対立が変化の対象になったためであると考えられる。音節チとツ、ヂとヅにおいては、摩擦要素の恒常的な実現によってこれらを互いに区別する子音上の手掛かりが増えている。また、後舌の tu と to, du と do の違いも、片方が破擦音になることで明瞭になっている⁶。このように、音節相互の区別という観点が重要である (ここで言う音節はモーラとの違いを問わない意味で使う)。タ行ダ行の破擦音化は、見かけのうえでは音声面だけの変化であり、対立の項に増減が生じないため、音韻論的観点から論じるべき点がないかに思われるが、上のように見てくると「対立」の概念を抜きに語ることはできない。サ行ザ行との並行性を考慮し、また、チ対ツ、ヂ対ヅにおける摩擦の音色の違いが持つ役割に注目することによって、「二つの」破擦音化を包括的に理解することが可能になる。母音の音色の違いを受けて、摩擦の部分が対立の識別に部分的にせよ深く関わるようになっており、その意味

でも音韻論的観点は欠かせない。

破擦音化は、例えば、可能性という点からいえば、口蓋化を契機にしてカ行のキにおいて起りうる (ki>ʃi)。しかし、これと同時に ku に破擦音化が起こることを想定するのは難しい。これに比べると、タ行、ダ行の場合には、サ行、ザ行と調音位置が共通しており、スズと同様にツツにおいても母音が中舌化し、チツ、ヂツと、シス、ジズとの間に並行的関係が形成されている。前節で述べたように、後続する母音が i である場合と u である場合とは、破擦音化の音声条件を一にしない。それにも拘わらず、双方に破擦音化が生じたとすれば、こうした関係性を無視して考えることはできない。

7. タ行ダ行破擦音化後にできた下位体系

破擦音化の後、チツはタテトとは別に、またヂツはダデトとは別に、母音のみならず摩擦の音色によっても区別される対を構成している。チ対ツ、ヂ対ヅの二対の成立である（後者はさらにジ対ズと合流する）。それらはサ行のシ対ス、ザ行のジ対ズと並行的な関係にあり、音韻体系の内部に次のような下位体系が出来上がっている。

口蓋的	非口蓋的
ʃ	s
ʃʃ	ts
ʒ	z
(dʒ	dz)

音韻論的解釈上は、この口蓋的か非口蓋的かの違いは、後続母音への環境同化による相補分布として処理可能であり、余剰の特徴として解釈するのが普通である。しかし、先にも述べたように、狭母音の音節（シとス、チとツ等）を区別する上で、摩擦の音色が果たす役割は軽視できない。破擦音化によって摩擦要素が挿入されることによって、子音の違いの重要性はより高まる方向に、つまり、区別の負担を子音の側に傾斜させる方向に変わっている。摩擦が音韻論的識別により大きな役割を果たす下位体系の創生である。

もちろん、言語一般に関して、破擦音と摩擦音とが上記のように必ず並行的に現れるというものではない。いま他言語の事例として朝鮮語を挙げるとすると、その s (ハ) は、口蓋的、非口蓋的の音色の違いが後続母音の違いに応じて現れる点では日本語のサ行子音と同じである (i, j の前で [ʃ] となるが、それ以外では [s])。しかし、他方において ʃ, ʃʃ, ʃʃ' (ス, ヌ, ヌ) はこれと並行的な関係を作るわけではない。すなわち、後続母音の如何に関わらず一貫して口蓋的な音色を持っており、他方、非口蓋的な実現 [ts] ([dz]), [tsʰ], [tsʰ] はそこが空隙となっていて現れることがない。また、同語の破擦音は音素としての確固たる位置を有している点でも日本語とは異なっている。

朝鮮語の音韻史を見ると、その歴史的変遷においては、摩擦音と破擦音との間にある種の並行的関係が見出されるようだが、それは日本語とはまた異なる面での顕れ方

をしている（李基文1972a, bを参照）。諸言語の一般問題として、音韻体系内での摩擦音と破擦音との関係に関してはさらに興味深い点が少なからずあると思われるが、ここではこれ以上詳しく見ることはできない。

話を日本語に戻すと、チツヂツの変化の特質は、既存の摩擦音サ行ザ行と相関関係を作る形で破擦音が生み出されたという点である。

8. 「四つ仮名」

比喩的な言い方をすれば、濁音のヂとヅは、破擦音化によってそれ自体の音節の中に摩擦要素を発生させるとともに、さらに進んで、摩擦音のジ、ズと一体化するという経過をたどった。これが、いわゆる「四つ仮名」の合流であり、ジとヂ、ズとヅは対立関係を放棄する方向をとった。ただし、ザ行がもともと摩擦音のみならず破擦音でも実現されていたとすれば、完全に合一化するまでの道のりはこのように一筋でなかったかもしれない（これについては後述）。

従来の日本語音韻史においては、「四つ仮名」に注目が集まり、破擦音化はそれを導いた先行現象としての副次的な位置に留まるとの印象がぬぐえない。とはいえ、「四つ仮名」合流を、破擦音化の過程の一部に位置づけ、その最終局面とする見方はそれほど目新しいものではなからう。しかし、破擦音化について前述のように考えると、あらためてその上で反省を加えておくべき点がないわけではない。

ともすれば、これまで「四つ仮名」対立の消失は、その「四つ仮名」という名称も手伝って、「四つ」であることに力点が置かれてきたきらいがある。具体的にいうと、図1のような見方がわりあい一般的であったと思われる。すなわち、ジとヂ、ズとヅのそれぞれの組が区別を失うという理解である。項と項の合流が、二組生じたとするものである。

ジ ←— チ

ズ ←— ツ

図1

しかし、前節に述べてきたことからすると、図2のように、口蓋的対非口蓋的の、二つの対の一体化と見たほうがよい。つまり、ヂ対ツの、ジ対ズへの合流、すなわち対と対の合流である。

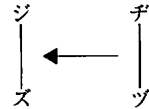


図2

ただ、このような総括は変化が収束した後の結果からいわば逆算して言えることである。言い換えれば、最初から結末に至る経過を一個の事象として抽象化し、その総体を捉える場合には有効である。しかし、変化の経過に従って細かく見れば、結果に至る道筋に沿って当初からこのように一直線に現象が推移したと言うことはできない。破擦音化は、その発端においては、はたして口蓋的対非口蓋的という図式が当てはまるような事象であったのか。これについては次節で論じることにする。本節の最後では、もう一つの問題、すなわちザ行子音に関する点について触れておく。

現在、ザ行子音は全体として（つまりザジズゼゾすべてに関して）、摩擦音と破擦音の両方の実現（厳密にはその連続帯の実現）を持っている。このような状態はいつ

ごろから見られるのだろうか。ひとつの見方は、「四つ仮名」合流の完了後にこのような状態がはじめて出来上がったとするものである。これに対して、すでに、それ以前よりヅ行子音に破擦音が存在し、これが摩擦音への完全な推移を逃げないうちに、ダ行の破擦音化が起こったとする（亀井孝他『日本語の歴史5』、小倉肇1998参照。ただし、両者の見解は同じでない）。これに従えば、言うまでもなく、ヅでの摩擦の発生、定着の過程はジズとの合流をそのまま意味する。ただ、実際には、ヅ行の音声実現には、前鼻要素、撥音が絡んでおり、より複雑な過程を経ていると考えられる（高山知明1993、2002参照。ここでは詳述できないが、これらについては一定の修正が必要である）。

9. 破擦音化の遅速の問題

「四つ仮名」の合流はジヂが先行し、ズヅが遅れたのではないかと指摘されている。破擦音化に即して言えば、チヂのそれがツツに対し、その生起時期が先行したと考えられる。実際、諸方言においても後者では破擦音化しない（あるいはそれが不完全である）状態を示す場合があり、結果としてズヅにおいて合流に至らない、いわゆる三つ仮名弁（柴田1978など）が存在する（他方、ジヂが合一化しない「三つ仮名弁」がない）。

もし、いま取り上げている破擦音化も同様の経過をたどったとすれば、前節までに述べてきた議論にとって無視できない問題をはらんでいる。口蓋的対非口蓋的という関係がこの変化の中心であったとすれば、時間差が生じたことはいったいどのように考えればよいのか、という点が課題となるからである。このことを考慮したうえで、あらためて想定される道筋を以下のように考え直す必要に迫られる。

口蓋的対非口蓋的という関係は、変化の最初期においてはその推進力の中心ではなかった。当初は、チヂにおいて、口蓋化が契機となって破擦音への傾斜を顕著にさせていた。その結果として、チヂの破擦音化が一步先んじて進行した。しかし、変化はそこだけにとどまらなかった。聞き取りにおける摩擦要素の有利さは、チヂだけでなくツツにも当てはまる。前節に述べたように当時の日本語はそのような条件にある。そのため、ツツも射程に入り、非口蓋的な摩擦要素が発生し始めた。つまり、途中の段階から、口蓋的と非口蓋的との差異が変化に関わるようになった。口蓋化に端を発した破擦音発生は、さらに、摩擦要素による口蓋的と非口蓋的の「対立」構築へと現象が変容した（あるいは、成長ないし発達を逃げた）と解釈される。

ともすれば、我々は言語変化を捉えるに当たり、下記のような変化の条件式にまとめることで満足しがちである。あるいは、このような抽象化を施すほうにむしろ力を注ぐ。「一般化」という観点からすれば、それはそれでもちろん意義のあることではある。

歯茎破裂 → 歯茎破擦（狭母音の前）

このような抽象化は、（一個の現象と見なされる）変化の、その前後に相当すると見なされる、時期を隔てた二つの静態を比べ合わせ、その違いを整理することによって

導き出される。その抽象の結果、その間の具体的動きは捨象されることになる。しかし、切り捨てられる動的側面に価値がないというわけではない。そこに注目することは、言語変化というものがどのように進行するのか（さらに言えば、その進行の途上で、現象がどのように変容するのか）という課題にとって大きな意義を持つ。その意味からすると、上記の日本語の事例は貴重である。数百年前の音変化であるにもかかわらず、それなりに材料が存在し、おぼろげながらもとはいえその復元が可能であるからである。精査がさらに必要であるが、「同一」の音変化（すなわちこの場合、破擦音化）と見なされるものであっても、その現象の性質が時間の経過とともに変わりうることを暗示してくれる。現象の最初から最後までを一つの、いわば統一的秩序をもって理解しようとする方向とは逆の視点もまた同じようにたいへん重要である。

10. 現代語における口蓋的対非口蓋的の「対立」

最後に、この破擦音化が現代語の音韻体系にどのように関わっているのかについて触れることにする。ただし、紙幅の都合により概略にとどめる。

一般に、音韻体系を導くには、対象となる言語の音の総体を調べ上げ、その現れ方を過不足なく説明することが求められる。しかし、周知のように、その作業を進めていくと、分布の偏りや均斉を欠く点が内部に存在するために、分析の結果、解釈が一義的に定まらない場合が出てくる。いずれにせよ、伝統的な音韻論的解釈のやり方では、音素を一義的に抽出することが要求されるため、結果として導き出される音韻体系は各単位をいわば平面的に排列したものとなる。しかしながら、音韻体系そのものに多面性があるとすれば、異なる解釈を同時に許すような枠組みでこれを理解する必要がある。とりわけ、通時的な観点から音韻体系について考察する場合にはそのことが求められる。

今、口蓋的対非口蓋的という観点からは、現代語の破擦音、サ行、ザ行の子音（すなわち、歯茎に関わる摩擦要素を含む類）を次のように整理することも可能である。当座処理すべき問題をいたずらに増やさないためにタテト、ダデトはあえて省いてある。各音は、どのような語に出てくるか、その語数がどのくらいあるかといった点で相互に著しい不均衡があるが、以下はそれを問わない面から切り取った一つの姿である。ts に関しては「おとつあん」「ごつあん」「ごつおー（御馳走）」や外国の固有名に現れる「ツェッペリン」「ルツェルン」を念頭に置く³。

非口蓋的	sa	so	su	se	--
口蓋的	ʃa	ʃo	ʃu	ʃe	ʃi
非口蓋的	za	zo	zu	ze	--
口蓋的	ʒa	ʒo	ʒu	ʒe	ʒi
非口蓋的	tsa	tso	tsu	tse	(tsi)?
口蓋的	tʃa	tʃo	tʃu	tʃe	tʃi

これら三者の ʃ, ʒ, tʃ（すなわち口蓋的な「単位」）に共通する分布上の特質は、後続母音が e のときにもそれが安定して現れることである（「チェス」「マルシェ」

「ジェラシー」などの外来語をはじめ、「ちえっ」のような周辺のなものも考慮される)。これとは対照的に、上記以外の子音ではキエ、ヒエ、ピエ、ニエなどいずれも安定せず、2モーラになることもめずらしくない。さらにイェも同じく安定的でない。例えば、「イエス・ノー・クイズ」の「イエス」は [ie] と二つの母音になりやすいし、「イエール大学」「イエールサレム」では単独の [e] となることもある。これらの子音と ʃ, ʒ, ʒj とのこの違いは単純な「あきま」による解釈ではうまく説明できない。

むしろ、シエ、ジェ、チュエの三者を拗音の一種として処理することは、体系全体の見地から一定の合理性がありはするが、他方、ʃ, ʒ, ʒj が i, e, a, o, u のすべての母音の前に分布することを考えるとそうした処理に解釈上の無理が全く伴わないわけではない。結局のところ、シャ、シュ、シヨ；ジャ、ジュ、ジョ；チャ、チュ、チョは、他の行と同じく拗音の成員であるとともに、体系の下位部分としての歯茎摩擦の類においては、口蓋的対非口蓋的の「対立的」関係の、前者の成員として解釈しうる側面も同時に併せ持っている。このとき、非口蓋的の子音は母音 i の前で口蓋的の子音と中和する (tsi の扱いに関しては、si, zi と同じような処理が可能かどうかの検討がさらに必要ではある)。

このような現代の状態に至るまでには、破擦音化以降、セ、ゼの変化がその過程でどのように関わったのかという問題が存在するし、また、外来語の大量流入といった外部的要因も加わっている。もちろん、これは破擦音化から一朝一夕に出来上がった体系ではない。しかしながら、現代語の口蓋的対非口蓋的の「対立的」関係の萌芽は、タ行、ダ行の破擦音化を契機に形作られたものである。第7節で下位体系の創生と呼んだものがそれにあたる。

以上の論に対しては IPA の字母 [ʃ] [ʒ] [ʒj] を弄した paper phonetics とする批判がなされるかもしれない。しかし、IPA の表に独立的な字母 [ʃ] [ʒ] が位置づけられていることは、本論の趣旨にまったく関わりを持たない。たとえそのような字母が存在しなくとも、以上の論旨が変わるところのない点を最後に断っておく。

〔付記〕本論文の内容は、平成18・19年度科学研究費補助金（基盤研究(C)18520352）の成果の一部を含む。また、本内容の多くの部分は、2008(平成20)年9月6日に誠信女子大学（ソウル）で開かれた韓日言語史学会学術発表会において、「日本語の破擦音化の音韻論的特性について」と題する発表で扱った。紙幅の都合で一人一人のお名前を掲げることができず残念ですが、その折、多くの方々から有益なご教示を賜ることができたことに厚く感謝申し上げます。

参考文献

- 李基文1972a『國語音韻史研究』（1977國語學叢書3 [國語學會] による、韓国）8。
口蓋音化。
李基文1972b『國語史概説 改訂版』（韓国、塔出版社）第八章「近代語 音韻」
ほか（藤本幸夫訳『韓国語の歴史』大修館書店）。
小倉 肇1998「サ行子音の歴史」『國語學』第195集。

- 亀井 孝他1964「日本語の歴史 5 近代語の流れ」第1章。平凡社。
- 柴田 武1978「方言の世界」『現代方言の源流』平凡社。
- 杉村孝夫2001「九州方言の四つ仮名」『音声研究』第5巻第3号。
- 高山知明1993「破擦音と摩擦音の合流と濁子音の変化—いわゆる「四つ仮名」合流の歴史的な位置付け—」『国語国文』第62巻第4号。
- 高山知明2002「耳障りになったザ行音」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』第21集。和泉書院。
- 高山知明2006「破擦音化と母音体系」『実験音声学と一般言語学—城生伯太郎博士還暦記念論文集—』東京堂。
- 中本正智1990「日本列島言語史の研究」第3章第3節「タ行音の構造的推移」大修館書店。
- 服部四郎1960「言語学の方法」岩波書店。

注

- 1 これに関する先行研究は重要であるが、ここではその一つ一つを掲げずに済ませる。
- 2 サ行子音、ザ行子音（あるいはその一部）が破擦音で実現されていたと推定されている。この破擦音化の段階では、サ行子音は破擦音から摩擦音に推移した後であったと考えられる。しかし、ザ行子音に関しては問題がある。
- 3 これに関しては、現代語のタ行ダ行に関する音韻論的解釈に関して論じた、服部四郎（1960）が参考にされる。この点は高山（2006）で言及したので、ここでは繰り返さない。
- 4 これらの文献は破擦音化以後の時期に属する。それゆえ、これがそのまま、ス・ツ・ズ（ヅ）のuが破擦音化以前に中舌的であったことを示すわけではない。しかし、中舌化の傾向と破擦音化とが関係することは間違いのないであろう。
破擦音化以前の段階を示す「伊路波」が、ツをドとするように、円唇の字母を当ててるが、これによって、破擦音化以前のツのuが相対的に見て後代より円唇的であったことになるかどうかは、個々の文献において、どの音を以て充てるかという方針の在り方が異なることも考えられるため慎重にならざるを得ない。
中本正智（1990）によれば、「日本語におけるいわゆる四つ仮名の区別の消失は、母音uの前進推移によるiとuの接近と大いに関係があると考えられる。四つ仮名の区別がuの前進推移のはげしい東北地方や琉球地方でははやくに失われ、uの前進推移のおそい西日本、とくに四国地方や九州地方で比較のおそくまで保たれている事実は、このことの一証となろう」とする。しかし、本稿は、破擦音化については「四つ仮名」のそれと切り離して独自の問題設定をする必要があると考える。
- 5 現代近畿方言では無声化が生じにくいといわれるが、程度の違いはあっても起こることには変わりはない。
- 6 後述するように、破擦音化の結果、ジとヂ、ズとヅの合流が起きていることから

すると、こうした音節相互の区別の在り方の変化は、他方において、ザ行とダ行の対立（ジとヂ，ズとヅ）を結果として犠牲にしており、その方向性は日本語の音韻史にとって興味深い。

- 7 本稿では、歴史的事象を扱う都合上「朝鮮語」をこの言語の用語として使う。
- 8 本稿は、各地の方言を包括的に論じるものではない。最初に述べた通り、近畿方言に限定している。例えば九州諸方言については（杉村孝夫2001など）を参照。
- 9 当該筆者は、三重県南部、伊勢地方の方言を母語に持つ。ここでは、「ごっつおー（御馳走）」は日常よく使われ、また地名「松阪」は現地では「まっつあか」と呼ぶのが一般的である。ここでの対象は近畿中央方言であるが、近畿周辺の状況を知る手掛かりとして併せて記す。